



熊本支部報

(公社) 日本山岳会熊本支部

第50号

令和3年4月20日発行

編集・発行者 中林 暉幸

(公社) 日本山岳会熊本支部事務局

熊本市中央区帯山 1-25-17-801

山本 直 方



春を告げる野焼き(高森・ラクダ山)

目	次
1 巻頭言・相変わらずコロナ禍の中で (支部長) …… (1)	③ 里山低山クラブ・玉東木葉山縦走 (城戸邦晴) … (7)
2 誌上登山教室：バリエーション山行 (土井 理) ……(2)	③ トレーニング同好会・鞍岳 (山本 直) … (8)
3 今年度後期 (2020年12月～2021年1月) 活動報告	4 寄稿・個人山行
① 山の写真展 (田北芳博) …… (4)	① 北アルプス縦走 (城戸邦晴) …… (9)

1 《巻頭言》 相変わらずコロナ禍の中で (支部長) 中林暉幸

2020(令和2)年度はすべてがコロナ禍に呑み込まれた1年でした。再び春が巡り桜が満開になっても一向に収まる気配は見えません。新年度の支部活動計画を提案してはみたものの、実際どれだけ実行できるか分からないのが実情です。医療関係をはじめ多くの方々が厳しい状況に置かれる中、巣ごもりを強いられるのを嘆くのは気が引けるところですが、いずれにしろ一日も早い収束を祈るしかありません。

日本山岳会創立120周年記念事業の一環として、今年度から全国各支部でそれぞれの地域の山岳古道の調査が始まります。熊本支部でも、支部通信でお知らせしていますように実動に入らねばなりません。おおよそ分かっているようで、改めてきちんとした資料にまとめ、公開するとなるとそれなりに難しい作業だと感じます。2023年度まで3年ほどの時間をかけての調査編集となりますが、まずは多くの情報を上げていただき、現地に足を運び、会員各位の英知を結集して山岳会ならではの文献として纏めることができればと思っています。会員会友の皆様方の積極的なご参加、調査活動を期待しています。

2 誌上登山教室 (副支部長) 土井 理

国際認定山岳医でもある熊本支部副支部長の土井理先生による誌上登山教室、今回が第7回目です。前回まで、登山の基本的な知識・技術について述べていただきました。今回はバリエーション山行として厳しい環境下での山行体験を3回にわたって紹介していただきます。

バリエーション山行

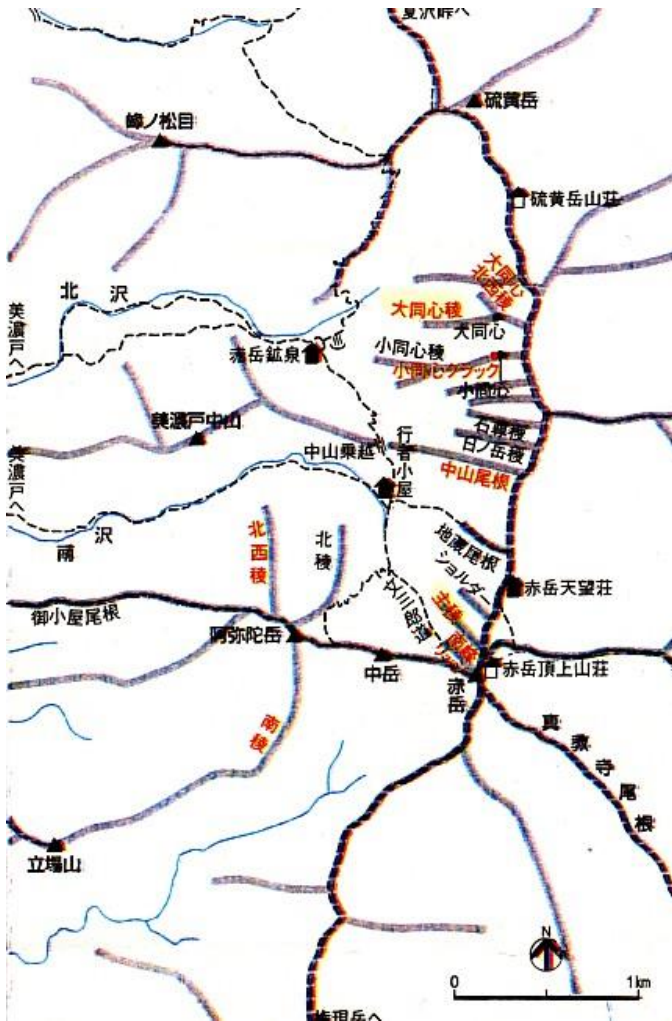
① : 八ヶ岳大同心稜-横岳 or 硫黄岳

「バリエーション(バリエーションルート)」ご存知でしょうか？ 登山用の地図(山と高原社等)を見ると赤い線や点線で登山ルートが記載されています。登山の一般的な本や雑誌を見ると、初級コース、中級コース、上級コース 等と記載されている頁をよく目にします。

「バリエーション」は、一般的な地図には記載されていない、ザイル等の登攀具を使用する必要がある登山ルートで、既に今まで多くの方が登攀し良く知られている登山ルート以外を「バリエーション」と呼んでいます。上級コースの更にと考えて頂いて良いかと思えます。バリエーションを登る時には、決して1人では行かないでください。必ず誰かパートナーと登って下さい。滑落したら助からない事もあります。本年は私が今まで登って来たバリエーションのルートと熊本からの交通機関等を記載していきたいと思えます。

バリエーションルートが多い山が「八ヶ岳連峰」です。まずは八ヶ岳から。バリエーションルート入門編が、八ヶ岳の大同心稜-横岳 or 硫黄岳のルートです。八ヶ岳連峰へ私が良く利用する交通機関を案内いたします。時間に余裕がある時に前泊するのは、常宿にしています八ヶ岳の「グリーンプラザホテル」です。大変お世話になっております。しかし仕事

から時間がなかなか作れません。仕事が終わった後 18:00 過ぎの新幹線で新大阪に行きます。新大阪からは夜行バスで茅野駅まで行きます。茅野には翌朝 7:00 頃到着します。茅野からはタクシーで美濃戸口まで行きます。夏は夜行バスが直接美濃戸口まで行く日もあります。美濃戸口から北沢ルートでは赤岳



鉱泉に、小屋或いは南沢ルートでは行者小屋に向かって徒歩で向かいます。北沢も南沢も冬は上部では道は氷で覆われています。ここで転倒して骨折する方もいます。転倒しない様に慎重に歩いてください。赤岳鉱泉は年中無休で営業していますが、行者小屋は冬は営業している日が決まっているので注意が必要です。初日はここでゆっくり休みます。冬は赤岳鉱泉にはアイスクャンディー（アイスクライミング用の人工の壁）ができています。時間があればアイスクャンディーでアイスクライミングの練習をするのが良いかもしれません。アイスクャンディーを使用するには、赤岳鉱泉で使用料を払います。近くにジョウゴ沢と呼ばれる冬のアイスクライミングのメッカがあります。



ジョウゴ沢で練習しても良いかもしれません。氷の上の歩き方、氷の壁の登り方の練習ができます。

翌日早朝、赤岳鉱泉で食事後に大同心稜に向かいます。 unnecessary 荷物は小屋に置いて行き、必要な物だけを持って行きます。荷物は極力軽い方が良いからです。赤岳鉱泉から大同心ルンゼ方向に、途中から左の方に大同心稜に登って行きます。入り口は登山道ではありませんので、ロープが張ってあって、普通の登山者が入らない様にしてあります。そこをくぐってルートに入って行きます。大同心直下までは一般の上級コース

程度で問題はありません。大同心直下になると、アイスミックスの岩場になります。大同心基部に取り付いたら、大同心基部を小同心方向（向かって右側）に巻いて行きます。ゆっくり、慎重に、丁寧に、足を置いて、歩いて行きます。大同心の右側背面のルンゼを横岳山頂方向に向かって登って行きます。上部に1ヶ所、ほぼ垂直の岩場を越える所がありますが、慎重さ、丁寧さ、勇気があれば難なく登って行けます。稜線まで出ると、右に行黄岳となります。横岳からは地藏尾根を行者小屋に向かって降りて行きます。硫黄岳からはジョウゴ沢の横を抜けて赤岳鉱泉に降りて行きます。



帰りは、デポした荷物を回収して、美濃戸口まで帰り、バス或いはタクシーで茅野まで戻ります。茅野からはJRで松本を経由し名古屋まで特急電車で、名古屋からは新幹線で熊本まで帰ります。帰りが遅くなる時には、翌日の仕事があるので、やむなく博多で1泊です。

3

2020年度後期（2020年12月～2021年3月）支部活動報告

● コロナ禍により中止した支部活動)

- ・ 1/16 新春晚餐会
- ・ 1/23 冬山登山講習会(くじゅう)
- ・ 2/21 雪山登山研修会(大山)
- ・ 3/7 千支の山
- ・ 3月 宮崎支部との交流会

● 中止した同好会活動

- ・ 1/9 トレーニング同好会：金峰山
- ・ 2/6 里山低山クラブ：宇土耳取山
- ・ 2/11 花を愛でる会：仰鳥帽子山
- ・ 2/13 トレーニング同好会：鞍岳
- ・ 3/21 里山低山クラブ：八代八峰山&八丁山 3/21

① 第13回山の写真展報告

担当 田北 芳博

開催期間 令和2年12月5日(土)～12月20日(日)

会場 山の店「シェルパ」1階

出展者 13名(前年度15名) 工藤文昭・中林暉幸・石井文雄・廣永峻一・城戸邦晴・池田清志・山本直・阿南大吉・木下洋子・千々岩泰子・中村寛・坂本雄二・田北芳博

作品数 45点(前年度48点)

写真展 設営 12月4日(金)午後4時から

撤収 12月21日(月)午前10時から

今年も例年同様、山の店シェルパにて日本山岳会熊本支部主催の山の写真展を行いました。

山の写真展も今回で13回になり、会場が山の店シェルパとなって10年ほどになると思います。会場のシェルパ様にはいつも感謝いたしております。今年は社会通念が覆ってしまうようなコロナ禍の中、登山の行動も大半が行動自粛、計画変更となることが多く、私たち登山愛好者にとっても苦痛の一年でした。そんな中で写真展が開けましたことは不幸中の幸いでした。遠出の登山はほとんどできない中、北アルプスなどの見応えのある写真などもありました。

また、コロナ禍の中、今回も多数の出展があり、昨年に劣らないほどの写真展示ができました。城戸邦晴さん、坂本雄二さんの秋の北アルプス風景などはみごとでした。阿南大吉さんの山写真は手前に人物など入れ、なかなか構図がいいようです。廣永さんの立田山の食べられるキノコ達、池田さんの2020金峰山での出会いなど、細かい動物や植物の生態などわかり、印象的です。石井さんのカエルに食いついたヤマカガシや山歩きで出会う草花、工藤さんの紅葉や阿蘇のミヤマキリシマなど印象に残っています。

今年はコロナ禍の中、北アルプスに登山された方はおられましたが、登山報告会は中止することになりました。

写真展期間中、シェルパの来店者が立ち寄ってくれますし、会員・会友の皆様のご協力を頂き、昨年に近い入場者のようで、好評のうちに写真展を行うことができましたと思います。また写真展の設営、撤収(わいふ一番館への移動)には大勢のご協力を頂き、順調に作業ができ感謝しております。



シェルパ山の写真展、展示場の入り口の様子

例年の写真展におとらず、今年もいい写真が揃い、出展者の皆さんの写真展に対する意気込みも感じました。その年に撮った写真でなくてもかまわないと思うのですが、出展者の皆さんはその年に撮ったものをとの思いが強いようです。

来年度はコロナ禍が収まったなら今回より幅広い出展となることを期待しています。

また、今年の受付当番の方は、長時間張付いていただいた方も多く、受付当番者の方々お世話になりました。記帳簿を見ると、記帳者が前回の120名より少し減って106名になりました。シェルパの展示においては、受付当番者がいないときが多いので、記帳しない来展者が多いものと思います。

コロナ禍の最中でありいろいろな行事がキャンセルとなる中、無事に写真展ができて安堵しているところです。御協力いただいた方々に感謝申し上げます。



シェルパ山の写真展・展示風景

わいふ一番館山の写真展

写真同好会担当 中村 寛 副担当 田北 芳博

開催期間 令和2年12月22日(火)～令和3年1月24日(日) 午前9時から午後5時まで
年末年始休館 12月28日(月)～1月4日(月) 通常休館 1月12日(火)・1月18日(月)

会場 わいふ一番館 菊池市隈府1番

出展者 14名(前年度15名) 工藤文昭・中林暉幸・石井文雄・廣永峻一・城戸邦晴・池田清志・
山本直・阿南大吉・木下洋子・千々岩泰子・中村寛・坂本雄二・三宅厚雄・田北芳博

出展写真数 53点(前年度56点)

写真展 設営 令和2年12月21日(月)午後1時半から

撤収 令和3年1月24日(日)午後4時から

今年は写真同好会として、わいふ一番館での写真展は2回目となりました。皆さん2回目なのでなれられて、昨年より要領よく展示設営ができたようです。

基本的にはシェルパの山の写真展をわいふ一番館へ展示会場を移すかたちですので、12月21日(月)の午後に移動設営を行いました。多数の手伝いを受けて、支障なく展示できました。

わいふ一番館は展示スペースもシェルパに比べて広いので余裕があります。展示場全体を使って展示することができました。基本的にはシェルパ写真展の移動ですが、三宅さん、石井さんの作品が加わるなど、新たに追加の展示作品も増えました。



わいふ一番館の外観



わいふ一番館の展示場風景 1

わいふ一番館の使用料は無料で、職員の方が1名常駐しておられ、来館者の対応、記帳依頼は基本的に任せられるので大変助かりました。記帳簿には101名（昨年130名）ほどの記帳がありました。

また、会場は静かな落ち着いた雰囲気があります。来展者は熊日の案内や菊池市の広報を見てこられる方が多く、写真趣味や登山趣味の方が多くようです。来館者の大半が丁寧に見ていかれるのでうれしいです。

今年はコロナ禍の最中で写真展の後半は緊急事態宣言も出されていたので、出控えされた方も多くいたのではないかと思います。そのような中、展示会場に足をお運びいただいた方々に感謝申し上げます。

出展者並びに、展示にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。（田北 記）



わいふ一番館の展示風景 2

《同好会》

①里山低山クラブ：玉東木葉山縦走登山報告

記録 城戸 邦晴

期 日 令和3年1月11日

参加者 石井文雄、安場俊郎、中林暉幸、池田清志、田北芳博、戸上貴雄、坂本雄二、森尾奈美、前田節子、松尾重勝、城戸邦晴

行 程 玉東町役場集合 (8:20) 出発 (8:35) 靈雨神社 (9:45~10:00) 高塚 (10:25)
松ヶ平山・昼食 (11:00~11:40) 掘削場上 (12:00) 新宮山 (1:20) 車両デポ地へ下山 (2:10)
玉東町役場で解散 (2:35)

玉東町役場を出発し有栖川宮御督戦地の碑の前を通り登山口へ入る。孟宗竹の中の道路を登る。やがてスダジイやコナラ、クヌギ、クスノキなどが繁る森に行く。木葉猿奥の磐座・夫婦岩の前を通る。真竹の林となり道路脇に竹で仕切られてハルリンドウの生育中と書かれたコーナーがあった。1時間ほどで石灰石掘削場の上に立つ靈雨山神社の前に出た。素晴らしい展望で、目の前の二ノ岳、三ノ岳が聳え、遠く三角岳、それに連なる山々を望むことができた。

少し戻り、木葉山の頂上はパスして縦走路に行く。高塚 (359m) と書かれた看板を見るが、地図上の高塚はその先にあった。



〈木葉山山頂・靈雨山神社〉



〈松ヶ平山頂・右側の山並みは小岱山〉

靈雨山神社から1時間で最高地点の松ヶ平山 (383.2m) に到着。ここも掘削場の上で北西方面が展望できた。眼下に新幹線が走り、その先に小岱山、三池山、そして雲仙岳が海の上に浮かんでいた。ここでしか見られない絶景を眺めながらゆっくりと昼食休憩。

ここから道は踏み跡が不明瞭になっていった。採掘場の崖にそって森の中を進む。ときおり石灰岩が露出している。イノシシのヌタ場が現れた。それは小さな沼の様相をなしていた。大木にイノシシが身体を擦り付けた跡もあった。樹皮が剥がれ泥がこびり付き、一見してそれと分かった。道は次第に藪漕ぎの様相となる。竹が倒れて道を塞ぎ、茨が衣服に引っ掛かる中を、枝を切り、どけながらすすむ。カゴノキ、タブ、ナミノキ、カクレミノ、ヤブニッケイ、ボロボロノキなどが現れた。

1時20分新宮山 (218.3m) に至る。ここには石の祠があり、菅原道真公らしき御神体が祀られており、榊、お賽銭が供えられていた。道もない山奥に詣でる地域の人々、天神を敬う素朴な信心を感じた。ここから道は西へ、そして北へ廻ってさらに北東へ向き真っ直ぐに進む。二度の下りと登りを経て、シイ

やクヌギの巨木の中、落ち葉を踏みながら下ること 50 分。あらかじめ車をデポしていた山部田の道路に出た。5 時間、6.7^{km}の縦走であった。

②トレーニング同好会：鞍岳

1.日付 令和3年3月13日(土)

2.場所 鞍岳(1118m)

3.参加者(敬称略)

世話役 山本

中林 坂本 江島 吉本 外山 本田(新会友) 山本(7名)

4.日程

登り……9:00 四季の里駐車場集合・出発 9:10→9:20 森林コース登山口

→9:40 林道出合い→11:20 鞍岳山頂→11:30 女岳(昼食)

下りパノラマコース ……12:00 女岳→13:40 四季の里駐車場

下り車道コース …… 12:30 女岳→14:10 四季の里駐車場

5.概要

今年のトレーニングで予定していた鞍岳登山は、コロナや雨のためすべて中止となっていたので、今回予定を変更して鞍岳とした。

四季の里に9時集合して、会友入会の本田さんを待ち、森林コースを登りはじめる。

途中林道出合いで、本田さん並びに参加者の紹介を行う。途中までは順調であったが、馬頭観音手前で世話役山本が不調となり、先頭を中林支部長と交代する。

鞍岳山頂で少し休憩し、女岳で昼食。不調の山本と車の同乗者の外山さんは車道を下ることとして、他の参加者は12時にパノラマコースを下山、四季の里にて解散した。

12時過ぎ、陽の原キャンプ場から鞍岳を目指していた、石井さん、安場さんが鞍岳山頂についた旨電話があり、手を振って確認した。

外山さんと山本は、少し遅れて12時半頃から、フキノトウを採取しながら、ユックリ車道を下山した。

(右)鞍岳頂上から厚い雲に覆われた阿蘇五岳を望む



鞍岳頂上から望む好天時の阿蘇五岳



5 寄稿 個人山行

槍・穂高縦走登山記録 (令和2年9月29日～10月8日)

城戸邦晴

29日(火) 沢渡まで

熊本=(新幹線)⇒大阪=(乗用車)⇒沢渡 4:45

いつか行きたいと思っていた大キレットへ、コロナ禍の今年、思い切って実行することとした。同行したのは大阪に住む私の弟で、やはり日本山岳会の会員である。これまで剣岳、西穂～奥穂縦走にも同行している。彼の日程にスケジュールを合わせて、大阪からマイカーで上高地へ向かった。仕事を終えての出発である相棒の夜通しの運転で、眠ることなく走り、未明に沢渡へ着いた。

30日(水) 上高地から槍沢へ

上高地 7:35→明神 8:20→9:45 徳沢 10:20→11:40 横尾 12:30→槍沢ロッジ 14:15

沢渡からタクシーで上高地入り(5:15)。まず日本山岳会の山岳研究所(山研)へ寄って管理人の山田さんに土産を渡し、キャンプの荷物を預けて出発した。落葉松の林の中をゆっくりと歩いていった。明神を過ぎたあたりで梓川に面した道路の崖に土嚢を積んだ大規模な補修箇所が目に入った。7月の大雨による梓川の氾濫の跡だろう。美しい環境にも手を加えないと自然は時に大きな災害を引き起こす。猿の群れが出てきた。ハルニレの樹が目立つようになって徳沢に着いた。徳沢園で休みコーヒータイム。周囲で登山者が休憩している。近くでガイドの声が聞こえる。ここは旅館組合に入っていてサービスがいいんですよ、と言っている。つまりここは山小屋ではないということだ。徳沢を出てさらに進むと河原に工事が行なわれているのがわかった。重機は見えないが河原が掘られている。樹林にはシラビソ、ウラジロモミが多くなった。足元にはノコンギクの紫が目についたが、季節的に花は少ないようだ。横尾で昼食。ここを過ぎると通行する人数はグッと減り、トウヒ、ブナの樹林帯の中を行く。槍見河原で初めて槍ヶ岳が顔を出す。一ノ俣、二ノ俣の清流、ダケカンバの林が美しい。槍沢ロッジまではたいして苦しく感じることもなく歩き、2時過ぎに無事到着。小屋の目の前は槍沢、対岸の横尾尾根の斜面ではもう一部紅葉が始まっていた。小屋の前に野鳥観察用の望遠鏡が1台、三脚に取付けて置かれていて、覗くと槍ヶ岳が見えた。その脇には、殺生ヒュッテは本年度の営業を終了しました、との看板が立っていた。小屋の受付ではスタッフはマスクを着け、まず検温と手のアルコール消毒から始まった。これが今回の山行の大きな特徴。宿泊者は少なく、小屋はガラ空きの印象。食堂ではスタッフはフェイスシールドをし、食事席は対面ではなく、斜め前の席配置だった。この小屋では風呂に入ることができた。一番風呂に入った。浴槽はわりと広くて2人がゆっくり入れた。1人15分以内でと言われ、出ると入口に順番を待つ人が並んでいた。石鹸・シャンプーは使えない、そして歯磨きも水だけです(これらは北アルプスのどの山小屋も同じ)。布団には紙製の枕カバーと襟カバーがつけられていて、宿泊者は持参したインナーシュラフを使っていた(事前に持参要請があった)。



二ノ俣

1日(木) 槍ヶ岳へ

槍沢ロッジ 6:25→12:00 槍ヶ岳山荘 槍ヶ岳往復 14:00~15:10

朝から山頂は雪が降ったとの情報が伝えられた。冬用の下着を着て上着も着て寒さにそなえて出発したが、この日は足が異様に重かった。寒さは思ったほどなく、暑くなって着衣を脱ぐ。ここらあたりで徹夜の影響が出てきたようだ。歩くのが苦しく、休憩が多くなった。紅葉が登るにつれて濃くなっていった。ナナカマドが色づいていた。カメラを据えて風景を撮っている人が何人もいた。山小屋の客にそれらしき人がいたと考えながらゆっくり登る。ずいぶん前だが槍沢で登山道にテントを張って叱られたことを思い出し、あれはどのへんだったかと探したがわからなかった。長い時間で記憶は風化していた。槍沢を喘ぎながら登った。槍ヶ岳山荘まであと 1200m、あと 500m、120mと標識があるが、それが遠い。山荘へやっとの思いでたどり着く。一帯では霧が出ていて、時折雨も降っていた。槍ヶ岳山荘は大きな山小屋である。ここでは外部者も食堂を利用できた。食事をし、休憩して、霧が晴れるのを待って槍ヶ岳に登った。頑丈な梯子がつけられており、登攀には大して困難はないが、山頂に立つとやはりうれしい。視界はあまり良くない。山頂には5~6人の人がいた。時折霧が晴れて、そのたびに歓声があがっていた。岩が濡れているので慎重に下った。今日は南岳小屋まで行く予定だったが、時刻を考えて(3時)計画を変更する。槍ヶ岳山荘に宿泊を頼み込み、了解を得て南岳小屋に断りの電話をした。明日の日程が窮屈になるが安全登山が第一である。小屋の宿泊は予約なしでもOKとなったわけだが、両小屋は同じ経営グループである。空が晴れて、夕方になって月が上ってきた。常念岳の上にくっきりと出た満月だった。槍ヶ岳が月の光に照らされて浮かび上がった。山荘は予約なしで宿泊したにもかかわらず、ゆったりとした部屋割りになっていて、身体を休めることができた。



2日(金) 大キレットに行く

大喰岳より槍ヶ岳

槍ヶ岳山荘 7:10→大喰岳 7:45→中岳 8:30→南岳 9:45→10:00 南岳小屋 10:30→キレット最低鞍部 11:30
→長谷川ピーク 12:05→12:35 A沢のコル 12:50→北穂高岳 14:45

槍ヶ岳山荘を出て大キレットに向かう。もう徹夜の疲れはない。離れていく槍ヶ岳の姿が美しく、何度も振り返り写真を撮る。槍は大喰岳からの姿が一番美しいと言われている。右手に秀麗な笠ヶ岳が眺められる稜線を進み、やがて左の眼下に天狗原を見る。ここでも紅葉が始まっていた。登山者の姿は時おり見かける程度。いまどきここを通過する人は大キレットに行く人と見てまず間違いはない。やがて南岳小屋に到着。早い昼食をとり、靴をアプローチシューズに履き替えた。



大キレットに行く

実は1ヵ月ほど前、常用していた靴の底が剥れて修理に出し、冬靴で山に来ていた。しかしこれは岩場では歩き難いのでアプローチシューズを持参していたのだ。嘘のように足が軽くなった。獅子鼻岩を見て大キレットへ下る。長いハシゴを降りてキレットの鞍部を歩く。ハイマツの繁った岩場で若いグループとすれ違った。この先の長谷川ピークはここで転落した人の名前を採ったらしいが、行き交うには狭い岩峰である。ナイフリッジで向こうから大きなザックを負った若い女性が一人で渡ってきた。どこかで見たことがある顔だと感じたが、どうもテレビの百名山番組等で見た人のようだ。お互いに譲り合いすれ違う。難所と言われる割に意外と単独行も



ナイフリッジを行く

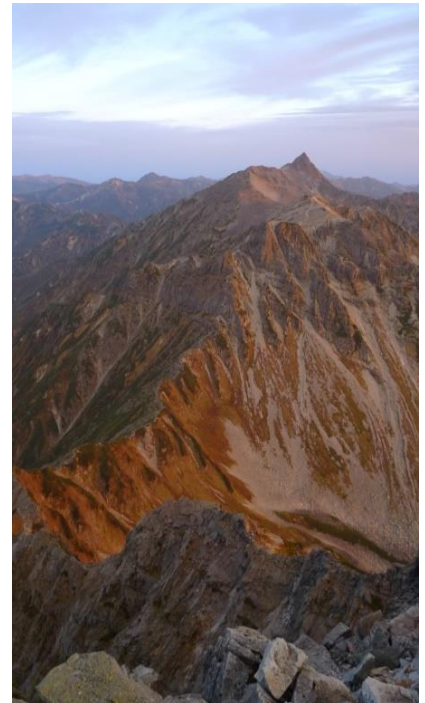
多い。鉄杭を踏みクサリを使って岩場を越えて、木製の橋を渡った鞍部がA沢のコル、ここで一休み。次が飛騨泣き。岐阜側に落ちたら助からないことからこの名がついたといわれるが、大して難しく思えずこれも越えた。進むにつれて右側には滝谷が圧倒的な迫力で迫っていて、引き込まれそうな力を感じた。最後の北穂高への登りが意外と厳しく感じられた。垂直に近い岩壁がいつまでも続き、下を見ると怖いほどの高度感、上にはなお岩壁が続いていた。大キレットは北穂側から行くほうが難しいと言われるが、なるほどこの岩壁を行程の最初に下るのは気持ちが悪いかもしれない。よし次はこっちから行こう、と思う。岩壁を登り終えると、そこは北穂高小屋のテラスだった。数人の人がくつろいでいる場所に入って行った。岩場歩きは楽しい。三点確保をしっかりと守っていけば、難所には足を置くステップがつけられており、危険は感じなかった。事前の情報で難度は昔ほどではないと聞いていたが、むしろ整備し過ぎではないだろうか。ハシゴ、鎖、ボルト、踏台型の足場もあり、難コースと言うには拍子抜けの感じだった。



飛騨泣き

大キレットのような岩稜を歩くときのポイントは、まず荷物を少なくすること、靴は軽いものがよいこと、荷物はすべてザック内に収容すること、だろう。転落すれば死を免れない岩稜地帯では、予想しない事態が起きるかもしれない、その場合の危険を避けるため、考えられるあらゆる準備をせねばならない。荷物が重いと体が振られ易いし、やせ尾根の岩稜歩きで石に躓いて転倒したらそこで一生が終わるかもしれないのだ。

北穂高に着いた時刻が3時近くになったので、この先の涸沢岳越え予定を打切り、北穂高小屋に宿泊を頼み込み、OKを貰って、穂高岳山荘に断りの電話を入れた。涸沢岳の難所を越えるのは次回の楽しみとしよう。北穂高小屋はいかにも昔からの山小屋の雰囲気に残り、私の一番好きな山小屋だ。元々ここに泊まりたかったのだった。この小屋の完成は昭和23年10月で、私が生まれたのは昭和24年2月、ほとんど同時期に生まれたようで、身近に思えるのだ。北穂高小屋で私たちに割当てられた部屋は蚕棚形式で、上段の3人用の広さに私たち2人だった。他をみると1人で使っている蚕棚が多い。なるほどコロナ対策がここにも、と思った。自分たちは予約外だから2人なのだ。天井に線路の枕木ほどもある大きな梁が使われており、墨で文字が黒々と書かれていた。最初の小屋作りのときのものらしい。この大きな材木をどうやって担ぎ上げたのか。当時ヘリコプターなどは使われなかったのだ。(小屋作りの苦労は創始者小山義治氏著「穂高を愛して20年」に詳しく書かれている)。夜、北穂の小屋を出てみると足元に涸沢のテント場の明かりが見えたのは意外だった。



黎明の槍ヶ岳

3日(土) 北穂高から上高地まで

北穂高岳 7:10→9:40 涸沢 10:00→13:15 横尾 13:30→徳沢 14:40→明神 15:20→上高地 16:25

朝4時ごろ起きて外に出ると、まだ暗いのにテラスに大勢の人がいた。いろんな人がいる。若い2人の男と1人の女のグループが登ってきた。2時に涸沢を出てきたと言っている。暗いのに登ってきたのかと思い、見ていると3人とも頑丈な新しい靴を履いているのが目をひいた。どっちへ行くのか聞いてみた。穂高を縦走するという。するとこれから涸沢岳を越えて奥穂へ向かうのか、難コースに行くことになるが、暗いのに大丈夫かなと思った。だけど前穂高までは時間的に行けないねと話している。私はつい行けますよと言ってしまった。自分には行ったことがあるから口に出してしまったのだが、それはずいぶん昔の話で雪の季節のこと、参考にはならない、とその場を切り上げた。雪?と聞いたような空気だったが、年寄の自慢話は聞き苦しいものだから小屋に引込んだ。私たちは7時過ぎに北穂高を下り涸沢へ向かった。何度も通った南陵コースだ。以前このコースを下山中転落したことがある。あの場所はどこだったかと、探しながら下りたがわからなかった。下山路の途中に長い鎖があって、みんな苦労していたが、懸垂下降の要領で難なく降りた。眼下に涸沢を眺めながら下山していったが、近づくにつれ涸沢の紅葉はまだ始まったばかりのようで、少しずつ失望感を味わいながら涸沢小屋へ着いた。テラスから見渡してナナカマド



紅葉の涸沢

の赤い色が少なく、ダケカンバの黄色もまだのようだ。さらに涸沢ヒュッテへ下る。テントは相当数張られており、ヒュッテのテラスには人があふれていたが、自分はまたすぐ来る予定なので、コーヒーを飲んで出発した。涸沢を下る途中、山岳遭難救助隊が数人登ってくるのに遭遇した。「山側に寄って下さい、救助隊が通ります」としきりに連呼しながら登ってくるのがそれだった。お揃いの赤いチェックのシャツを着ていて、胸に長野県警察のワッペンがあった。転落事故が発生したらしい。このような一方

が谷の山道ではすれ違う時の接触が転落につながる、したがって谷側によけてはいけない。その知識はあったが、あらためて認識した。あとで知ったが幸い死亡事故には至らならなかったようだ。夕方上高地山研に到着。山研のこの日の宿泊は我々2人のほか地元のひと1人、計3人だった。夕食時に遭難の話になり、先日穂高の吊尾根から70代の男性が転落死した話が出て、あんな所でどうしたら落ちるんだろう、と地元の人は話していた。あんな所といっても、高齢者が危険のある登山路に行くとき、普通考えられない転倒が起こりうる。自分もこれまで幾つかの際どい体験をしているが、それらはすべて今の自分の登山の基礎をなしている。日常の登山で忘れないようにしている。結局、自分の目ざす登山に合った日常の訓練が必要なのだろう。

今回、山研のコロナ対策として、宿泊者はシュラフを持参するように事前に言われていた。敷布団と毛布は使うことができた。山研では食事は自前だが、頼めばご飯とみそ汁は提供される。お風呂にもゆっくりと石鹸も使って入れた。翌日が雨のようなので、疲労回復も狙ってもう1泊を頼んだところ、グループ予約が入っているので無理な状況だったが、なんとかOKをもらった。お土産は役に立ったようだ。1日涸沢入りが遅れることで紅葉のチャンスを見逃すのでは、と心配だったが、雨の中でのテント設営は嫌だった。

4日(日) 上高地滞在(若山牧水の足跡を訪ねて)

同行の弟は仕事があるのでと帰って行き、自分が一人残った。この日は朝から山研を出て上高地を散策した。じつは若山牧水の探訪の跡をたどりたかったのである。牧水は上高地滞在時に雄大な景色に感動し、いくつかの歌を書いている。私は河童橋から右岸を下った。西糸屋、アルペンホテル、ウェストン碑、そして上高地温泉ホテル前に来た。若山牧水の紀行文にある上高地温泉の旅館はここではないかと思ったが、思いのほか立派なホテルだ。中に入るのをためらっていたら、日本山岳会会員加藤潔展開催中の表示が目に入った。これだと思い、入ってみると上高地と槍穂高を描いた絵が展示されていた。絵に見入っていると画家加藤氏本人がやってきた。まだ若い人だった。購入を勧められたが、そんな余裕はなく、なんとかごまかしその場を離れた。そしてフロントに行き、若山牧水が泊まったのはこのホテルかと尋ねると、受付の女性は資料をめくって、確かに宿泊していますと答えてくれた。そして数首の短歌が毛筆で書かれた紙のコピーをくれた。その中に私の好きな牧水の歌が2首あった。

『立ち向ふ穂高が嶽に夕日さし沸きのぼる雲はいゆきかえらふ』

『いわけなく涙ぞくだるあめつちのかかるながめにめぐりあいつつ』

ああ、ここだったのだ。牧水はここでの雄大な景色に強く感動し、ふたたびこの眺めを見るために長生きしたいとうたったのだ。彼は自分の命が長くないことを知っていたのだろうか。(このとき牧水は36歳、彼は43歳でこの世を去った)。風呂場に書がかかっているので入りませんかとフロント係に誘われたが、断ってホテルを出た。牧水のうたった雄大な景色は雨雲に隠れて見えなかった。(牧水のこの旅は「みなかみ紀行」中公文庫版に所収。)小雨の降る中、ゆっくりと周囲を散策し、4時頃に山研へ帰ると、さっきの展示会の案内ハガキが積まれて置いてあった。管理人の山田さんは展示会の画家のことを知っていた。



涸沢テント村

5日(月) 再び涸沢へ

上高地 7:00→明神 7:50→徳沢 8:40→9:40 横尾 10:30→涸沢 13:30

元気よく涸沢に向かう。早朝の1人歩きなので熊に遭遇しないよう、クマ除け鈴をザックにつけて鳴らしながら歩いて行った。鈴は好きでないのだが、数日前小梨平でキャンプ中の人々が熊に襲われる事故が起きていた。涸沢には早く到着したが、借りたかったテント下敷用のコンパネはもうなかった。先着100名なのだ。地面の平らな場所を探して早々にテントを張った。その後、紅葉の写真を撮影。今年の色づきは今一つだった。テント設営の申し込みはゆっくりでもよかった。1泊1000円支払う。「マスクをしてない方は受付できません」としきりに言っていた。これもコロナの特徴か。300~400張のテントが張られていたが、一人用のテントが多い。大きなテントで、輪になって騒ぐ場面はほとんど見られなかった。早めに食事をすませ眠りについた。静かな夜だった。寒さをひどく感じることはなかったが、足が冷たくて目を覚ました。凍傷の場面でないのに指が痛くて眠れない。思いついて靴下を取り替えたら、今度は眠れた。夜中にトイレに起きたが、トイレまでが意外に遠かった。ここは下が岩だらけなので、さらにテントの紐が張ってあるので、夜歩くのは歩きづらい。そして自分のテントを捜す目当てをつけておかないと、なかなか帰りつけない。同じようなテントが沢山あって、ぼんやりしていると自分のテントがどこにあるのかわからなくなるのだ。しかし、見上げれば満天の星がきらめいていた。テント場から北穂の小屋の灯りが見えた。上から見えたのだから当然なのだが。

6日(火) 涸沢滞在

モルゲンロートを期待して早い時間に涸沢ヒュッテのテラスで待つが、出なかった。食事のあと、テントを張る場所を移動する。コンパネも入手して、トイレに近い場所に張った。そしてこの日は紅葉の写真撮影で一日を過ごした。テラスからカメラを持って周囲を見渡していたとき、隣で女性が大きなレンズで撮影している。腕章をはめていた。取材のカメラマンらしい。やがてその人はテント村の中を下の方へずっと歩いていき、下端のひととき



涸沢朝焼撮影する

わ鮮やかなナナカマドの近くまで行って、その紅葉を前景に涸沢を撮影していた。なるほど綺麗に見せる撮影技術だなと感心し、あとから自分もそこまで歩いて行って、同じような構図で撮影してみた。翌日スマホを見ていると同じところから撮った写真がヤフーのニュースに上げられていた。あの人が撮ったものだった。涸沢に滞在中、ゆっくり読書でもしようと用意していた本は開く機会は来なかった。

7日(水) パノラマコース

涸沢 7:20→屏風コル 8:50→10:5 屏風頭 10:35→屏風コル 11:45→奥又白河原 13:50→遭難碑 14:30
→林道 14:40→15:20 横尾 15:50→徳沢 16:40

モルゲンロート撮影に成功。朝、涸沢岳が燃えるように染まった。みんなテントから出てシャッターを切っている。もっと紅葉に光が当たるところを撮りたかったが、その前に陽が陰ってしまった。これ以上は無理なようで、人々は引込んでしまった。ヒュッテに行って天気予報の掲示を見ると、天気が下り坂に向かうという。台風の影響を受けそうだ。今日で撤収することに決めた。帰りのルートはまだ

通ったことのないパノラマコースを越えていくことにする。前穂高の末端、屏風岩の肩いわゆる屏風の
コルを越えて新村橋に出る道である。健脚、熟練者、時間に余裕のある人向け、とルートの入口に書か
れていたが、年配の夫婦やグループが次々と登って行く。道は初めから急な登りで、クサリとハシゴの
ある、岩壁をトラバースするような箇所が多
かった。涸沢の紅葉の全景を見下ろす展望の
よいルートだったが、屏風のコルまでは予想
したより遠かった。コルに到達してそのまま
素通りして下る人が多かったが、自分はコル
に荷物を置いて屏風の耳へ行ってみた。ここ
までは人がいた。キャーキャー騒いで写真を
撮っている。足元に見たことのない白い球状
の実のついた木が生えていた。これは何だろ
と見ていると通りがかった人がシラタマノキ



屏風の頭より槍ヶ岳

ですよと言った。さらに屏風の頭へ。地図の上では登山道が破線で表示され一般向きではないとあって、
さすがに行く人はいない。それでもせっかくだからと思い一人で行くことにした。這松が道を塞ぎ衣服
が引っ掛かる中を一旦下り、登り返して屏風の頭にたどり着いた。屏風岩のてっぺんに大きなケルンが
立っていた。その先に槍ヶ岳、左に穂高、涸沢が正面からくっきりと、右に常念岳が見えた。遠く富士
山、北岳、甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳などを望むことができた。雄大で美しい景色だった。自分は今、屏風岩
の先端に立っていた。足下はすっぱりと切れ落ちていた。

屏風のコルからの下りは最初は九十九折の楽な道だった。道の脇にはオヤマボクチがたくさん咲いて
いた。次第に石ころの道になり、岩の上を踏んで歩き、倒木の下をくぐり、道は延々と続いていた。昼
食をとる場所が見つからない。やっと奥又白谷河原に着く。川に水はなく、白い大きな岩石が累々と重
なり、下流まで続いていた。上部に岸壁が見えた。ここで遅い昼食をとった。水を入れておくとおにぎ
りができている簡易な食べ物である。食べ終えて道をさらに下ると、ケルン状に石の積まれた遭難碑が
あった。碑は三つあって、山に眠るの碑、若山五朗君の碑、今一つは読めなかった。若山五朗とは昭和
30年に前穂高東壁でナイロンザイルが切れて墜落死した人である。井上靖「氷壁」のモデルになった事
件として知られる。私はここを一度見ておきたかった。さらに下ると奥又白谷に砂防ダムが三つ四つと
続いていた。穂高に砂防ダムがあるのか、と残念な気持ちを抱く。これほどの美しい環境を壊さずに治山
治水を実現できないものか。国土省は何かと構築物を作りたがり、環境省はそれに抵抗する、という構
図が目に見えるようだ。やがて林道となり、梓川に出て私は左へ道を取り横尾に向かった。じつは登る
とき横尾で忘れ物をしていて、薄手のズボンを脱いで樹にかけてそのまま出発したのだ。山研にも到着
予定を連絡することになっていたがスマホの電源はもう切れていた。横尾山荘の受付で館主らしき人に
忘れ物を尋ねたが該当物はないとのこと。日本山岳会の山研に連絡したいがスマホの電源が切れて困っ
ていると話すと、自分で電話機に向かいダイヤルして受話器を渡してくれた。お礼を言うと、自分も日
本山岳会の会員ですからという。感謝の気持ちで一杯になった。横尾山荘は他の山小屋と較べて特にき
れいだった。このあと徳沢へ向かい、薄暗くなって到着、小雨が落ちていた。テントを張るころに本降
りとなった。なんとか間に合ったが、雨は朝まで止まなかった。

8日(木) 上高地を去る

徳沢 6:00→7:30 上高地=(バス・電車)⇒松本=(特急)⇒名古屋=(新幹線)⇒熊本

3時半に起きたが雨は降り続いていた。雨中のテントの撤収に手間取って出発は6時になった。雨の中を急ぎ足で歩くが、濡れたテントは重かった。雨が降り台風が近づいているというのに登ってくる人が結構いた。鹿がしきりに鳴いた。明神付近に来るとまたも猿の群れに遭遇。小梨平では猿に餌をやっている人もいた。結局、上高地まで1時間半かかって、7時半到着。まずバスターミナルへ行って9時半のバスを予約し、次に山研に行き、預けていた荷物を受け取る。横尾山荘のご主人に世話になった話をすると「あの人も山田さんなのですよ」という返答だった。そういえば、一ノ俣小屋をつくり、後に横尾に移転したのは山田利一氏と本で読んだ(木村殖著「上高地の大將」)。親切なあの人はおそらく3代目だろう。山研の山田さんの休んでいきませんかの声に、濡れているからと辞退して、ターミナルへ戻り、土産物を買って、荷物をまとめ新島々行のバスを待った。

念願の大キレット越えを果たした今、来年はどこへ行こうかと早くも考えている。遙かなる日本アルプス、そこへの山行を思えば胸が高なる。山をやっていてよかったと思う瞬間である。

(注) 行程時刻には交通機関・乗物の時刻は省いた。

事務局より (会友の異動) : (敬称略)

会友退会 : 高屋敷しの (2021年3月)
井上美由紀 (2021年3月)
椿 千鶴 (2021年3月)
小田博章 (2021年3月)
会友新加入 : 木下昭二 (熊本市西区) (2021年4月)
本田敦子 (熊本市中央区) (2021年4月)

《編集後記》

3年前から支部報の印刷を自前で行うとともに、いくらか体裁を改めました。印刷経費を削減して、支部会計の改善を狙いとしたものでしたが、体裁よりも実を重視して、支部活動の動静をお伝えし、支部の活性化に少しでもお役に立てればとの思いで取り組んできました。ただ編集から校正、印刷まで一人で担当しているため、ミスを見逃したり、いつも同じパターンになっているように思います。

新しい風を入れていただくために、支部報(支部通信も併せて)の記事や編集、印刷等に対する、ご意見、ご感想、ご批評等いただければ、私なりにまた工夫改良していきたいと思っております。どうぞ忌憚ないご意見をお願いいたします。また、やってみるとなかなか面白い一面もあります。各部門よりその都度きちんと活動報告が出されますので原稿集めに苦勞することはありません。4年目に入るこの機会に、編集にご参加あるいは中心になって編集していただける方をぜひお願いいたしたく存じます。ご連絡をお待ちいたします。

中林 暉幸 Eメール tenakarin@yahoo.co.jp
☎ 090-5289-3817